

# 祭りの変化から見える日本社会

芳 賀 学

## 【略歴・所属】

東京大学大学院社会学研究科博士課程 満期退学  
現在、上智大学総合人間科学部教授

## 【専門】

宗教社会学、文化社会学、社会調査方法論（質的調査法）

## 【主著】

『仏のまなざし、読みかえられる自己』ハーベスト社、2006（共著）

『本を生み出す力』新曜社、2011（共著）

『若者の現在』（全3巻）日本図書センター、2010-2012（共編）

## 1. はじめに

こんにちは。今結構なご紹介をいただきましてありがとうございました。おっしゃっていただいたとおり、私の専門は「宗教」や「文化」です。ここ10年ほどの間、「祭り」の研究をやっておりまして、今日はその話をしたいと思っています。

「祭り」、非常に伝統的な響きのある言葉で、何百年前から行われているなどという話がよくある文化活動です。何百年前から同じことをずっとやっているのではないかと思う人も結構多いのですが、調べてみるとそれほど昔からでもありません。実は、祭りは時代によって大きく姿を変えながら、現代のわれわれに、伝統的と言われているものを引き継いでいるのです。

たとえば、東京の祭りというのは、時代劇などを見ると江戸時代にも御神輿を担いで盛大に練り歩くようによく描かれるのですが、実はあの映像はかなり間違っています。江戸時代の江戸の祭りは、多くが山車を引っ張るタイプのもので、でもそれが明治の、近代化が起こった頃に「山車」

から「御輿」へと変えられてしまったのです。なぜかというと、東京の町の中に電線が引っ張られたからです。東京が電化されていく、路面電車が走る、というようなことになってきますと、交差点の上に電線が横切ることになります。昔の山車というのは、京都の葵祭がその頃の祭りのモデルになったものですので、それを見れば分かります。「○○山」「○○鉾」と言われるような山車というのは、とても背が高いので、電線があると通れないわけです。ですから山車はほとんど全部しまい込まれてしまった。その点御神輿ならば高さがありませんから、それを担ぐタイプの祭りに変わったということになります。東京はその後関東大震災や戦災などがあって、しまい込まれた山車のほとんどが焼けてしまいました。

ですが、伝統的な祭りを研究した松平誠先生によると、「北関東の町を回ってみると、倉庫の中に朽ち果てかけた山車というのをいくつも見ることができる」などという事態をその著作から読み取ることができます（松平誠『現代ニッポン祭り考』小学館、1994年）。

## 2. 時代による祭りの変化

実はわれわれの暮らし方の変化によって祭りの形も変わってくるのです。例えば現在私が研究している対象の1つに阿波おどりがあります。400年前に長宗我部元親が四国の覇者だったのですが、豊臣秀吉に負けて高知に押し込められ、阿波の国を秀吉配下の蜂須賀氏に譲ることになり、蜂須賀公が徳島へ入城していくことになります。阿波おどりは、その時に民衆が喜んで踊り出して始まったと言われています。あくまでも「言われている」ですけれども、そこから見るともう400年の歴史があるのです。

そのような話を聞くと、阿波おどりというのは400年前からずっと今の姿で踊られているように聞こえます。ですが実は、江戸時代に定着した阿波おどりの伝統的なメロディである「よしこの」は近年廃れつつあります。「よしこの」の名手の女性（お鯉さんと呼ばれていました）が先年亡くなったのが象徴的でしょうか。とにかく400年の間、伴奏の音楽は一緒ではないのです。そして踊りですから、伴奏の音楽が変わってしまうと踊り方も変わってしまうわけです。時代によって阿波おどりの踊り方も変わってきたことになります。

大阪に足立重和さんという社会学者がいます。この方は飛騨の郡上おどりの研究をやっておられるのですが、彼の研究を見ると、郡上おどりも第

二次大戦後、大きく踊り方が変わってきているそうです（足立重和『郡上八幡 伝統を生きる』新曜社、2010年）。

### 3. 日常と非日常

祭りとは時代によって変わるものです。それではなぜ祭りは時代によって変わるのでしょうか。現代の変化については追いついて話していきましょけれども、その一番簡単な理由は、祭りというのは普段の日常生活とは違う世界だからなのです。祭りの時だけ世界が普段とは変わるわけです。「変わる」というところに祭りのある意味での本質があり、祭りをやる意味があるのです。ですから、普段の暮らし方が変わってくれば、普段と違うものも変わるということになります。

私はもう一方で宗教の研究をやっていますが、宗教の聖地というところも普段とは違う、言わば日常ではない非日常の世界です。例えば、高野山根本大塔の本尊というのは巨大な金色の仏像です。その前に佇んでみると、金色の巨大な仏像がのしかかのように感じます。この金色の仏像があり、密教というのは元来色があふれていますので、さらに赤・緑・黄色、いろいろな色がお堂中に満ちている、という世界です。江戸時代ぐらいまでの日本というのは、町の中に色がありません。そこに暮らしている人が高野山の山上伽藍に行くと、そこだけは色に満ちているわけです。普段の暮らしとは違う、非日常の世界なわけです。だけど今のわれわれは色に満ちた世界に生きていますので、同じところに行っても非日常とは感じません。当然今の人たちが非日常を感じるような宗教施設を作ろうと思えば、もっと違ったものを作ることになります。

祭りは伝統的なものと言われているわけですが、それが非日常である限り、それが祭りをやる意味である限り、われわれの暮らし方が変われば祭りも変わる。祭りの変わり方を見ていけば、われわれの暮らし方の変化も垣間見える、ということになります。そのようなことを今日は話してみたいと思っております。

### 4. よさこい系祭り

今日取り上げるのは、祭りの中でも最も新しいグループのものです。先ほど例に出した阿波おどりと高知発祥の「よさこい系祭り」を主に取り上げます。祭りには岸和田のだんじり祭りなど、さまざまな山車を引っ張る

ものとか、いろいろなバリエーションがありますけれども、この2つは両方とも踊りの系統の祭りです。どういうものか分からないと、この後の話を聞いても実感が湧きませんので、映像を用意しました。

まずお見せするのは「原宿表参道元氣祭スーパーよさこい」の映像です。東京で行われる最大規模のよさこい系祭りです。東京でも実はよさこい系祭りをやっているのです。100チームほどが集まって、6,000人ほどの踊り子が原宿の街で踊ります。原宿の表参道の公道を400メートルにわたって締め切って踊るのですが、いくつかある会場の中でそこが最も華やかな場所ということになります。どのような踊りをやっているのか、まずは映像をご覧くださいと思います。

〈映像視聴を終えて〉以上が原宿表参道元氣祭りスーパーよさこいの抜粋でしたが、様々なチームが見られたのではないかと思います。今までは表参道の流し踊り（またはパレード演舞）と言われるものを中心に見ていただいたのですが、よさこい系祭りにはもう1つステージでの演舞があります。そちらの例として、日本最大のよさこい系祭りである「YOSAKOIソーラン祭り」の今年のグランプリの映像を見ていただきたいと思います。

表1 主要なよさこい系祭り

名称	開催地	開始年(回数)	開催日	チーム数	踊り子数
YOSAKOIソーラン祭り	北海道札幌市	1992年(24回)	2015.6.10-14	270	27,000
みちのくYOSAKOIまつり	宮城県仙台市	1998年(18回)	2015.10.10-11	173	8,000
朝霞彩夏祭関八州よさこいフェスタ	埼玉県朝霞市	1994年(22回)	2015.7.31-8.2	96	6,000
坂戸よさこい	埼玉県坂戸市	2001年(15回)	2015.10.9-11	65	2,700
池袋ふくろ祭り東京よさこい	東京都豊島区	2000年(16回)	2015.10.10-11	108	8,000
原宿表参道元氣祭りスーパーよさこい	東京都渋谷区	2001年(15回)	2015.8.29-30	100	5,000
ドリーム夜さ来い	東京都港区ほか	2002年(14回)	2015.10.31-11.1	77	6,000
にいがた総踊り祭	新潟県新潟市	2002年(14回)	2015.9.19-21	250	15,000
よさこい東海道	静岡県沼津市	1997年(19回)	2015.11.7-8	69*	3,000*
浜松がんこ祭り	静岡県浜松市	2001年(15回)	2015.3.14-15	109	4,700
にっぽんど真ん中祭り	愛知県名古屋	1999年(17回)	2015.8.8.28-30	207	23,000
瑞浪バサカカーニバル	岐阜県瑞浪市	2000年(16回)	2015.12.12-13	285*	11,000*
安濃津よさこい	三重県津市	1998年(18回)	2015.10.10-11	69	3,300
京都さくらよさこい	京都府京都市	2005年(11回)	2015.4.4.&4.5.	103	4,500
こいや祭り	大阪府大阪市	2000年(16回)	2015.9.12-13	95	3,000
泉州YOSAKOI 糸えじゃないか祭り	大阪府泉大津市	2004年(12回)	2015.10.17-18	100	5,000
神戸よさこいまつり	兵庫県神戸市	2000年(16回)	2015.8.1-2	120	4,000

## 祭りの変化から見える日本社会

おどろんや～紀州よさこい祭り	和歌山県和歌山市	2004年(12回)	2015.7.26 & 8.1-2	91	3,500
よさこい祭り	高知県高知市	1953年(62回)	2015.8.9-12	205	18,000
おかやま桃太郎まつり・うらじゃ	岡山県岡山市	1994年(22回)	2015.8.1-2	139	6,250
ひろしまフラワーフェスティバル・きんさいYOSAKOI	広島県広島市	2002年(14回)	2015.5.3-5	60/40**	2,900
ふくこいアジア祭り	福岡県福岡市	2000年(16回)	2015.10.9-12	64	2,000
YOSAKOIさせば祭り	長崎県佐世保市	1998年(18回)	2015.10.16-18	180	7,000

主催者発表による。\*未開催につき2014年データ、\*\*ステージ/パレード

〈映像視聴を終えて〉資料を見ていただきたいのですが、よさこい系祭りと言われる、高知のよさこい祭りから始まった一群の祭りは、今は北海道から九州まで、小さいものまで数えると200箇所以上で行われています。主なものの一覧表からもずいぶん開催されていることが見て取れると思います。最も規模の大きいグループは、高知のよさこい祭り、札幌のYOSAKOIソーラン祭り、そして名古屋のにつぼんど真ん中祭りです。この3つが、参加チーム数が200を超えて、踊り子の総数も2万人前後に達するといふかなり大規模な祭りです。けれどもそれに準ずるような祭り、参加チームが100前後のものは、東京の池袋や原宿で行われるものも含めて、日本全国で開催されているわけです。

伝統的と言われている祭りは江戸時代の頃——と言っても初期とか中期ではなくて大抵幕末の頃なのですから——に今の形ができあがっています。そのようなタイプの祭りは大抵の場合、その町だけ、その地域だけで行われます。〇〇祭りというのは地域固有のものであったわけです。しかし、このよさこい系祭りは全国的に広まっているのです。どのようにこの祭りが広まったのかということから、まず話をしていきたいと思います。

### 5. よさこい祭りの誕生と発展

よさこい系祭りが日本全国に普及するようになったのは、そこまで昔のことではありません。90年代の初頭までよさこい祭りは高知にしか存在しませんでした。このよさこい祭りは、昭和29年(1954年)に、戦災と南海大震災などの影響で非常に経済的に厳しい状況を迎えていた高知で生まれました。隣の徳島には阿波おどりがあるので、それと対抗できるぐらい盛り上がる祭りを作ろうじゃないかと、高知市や商工会議所の人たちが集まり計画を立てて作ったのがよさこい祭りです。

「よさこい」というのは土佐弁で「夜においで」という意味です。武政

英策という、愛媛県出身で高知に住んでいた作曲家が、この祭りを作るに当たって、伴奏になっているメロディーと踊り方を任せられました。武政さんは苦勞した末に、「よさこい鳴子踊り」という音楽を考案し、田んぼの雀を追い払うための道具であった鳴子に柄を付けて手で持って振るという踊り方を考えました。

最初は20チームあまり、踊り子の総数も750名程度だったのですが、年を経るごとにこの祭りの規模はどんどん大きくなります。70年代には50チーム前後、5,000名前後の踊り子が集まっていますし、80年代の中盤には100チームを超えて踊り子も1万人を超えます。そして今年(2015年)のデータを見ると、205チーム、1万8千人という踊り子を集めるまでに成長しました。

踊り方も当初は、盆踊りの音頭のような音楽に合わせて浴衣を着て統一の振り付けで揃って踊るというものだったので、全国的にもそれほど珍しいタイプの踊りではありませんでした。ですがこの踊りは、途中から様々な形に変化していくこととなります。最初の踊り方は高知正調と呼ばれていますが、フランスのニースの祭りに参加するなどという事情があり、その後サンバ調の踊り方が取り入れられます。サンバ調が入った後には踊りの幅が広がり、さらにジャズダンス風やヒップホップ調なども取り入れられました。先ほどの原宿の踊り方を見てもいろいろな要素が混じっていることが分かるかと思います。そうした形で踊り方のバリエーションは広がっていったのです。

ひとつのチームの踊りは全部で4分半程度です。いまは伴奏もその中の10数秒間「よさこい鳴子踊り」の一節を入れれば、あとはどのようなものでも構わないという形になっていますので、本当に種々様々です。和風のものもあれば洋風のものもあるし、オリジナルのものもあれば、何か別の元々ある楽曲を使うということもあります。そして当初は生演奏で伴奏を流していたのですが、途中から大型のスピーカーを積んだトラック——地方車と言うのですが——を最初に走らせ、後ろ向きに大音量で流し、踊り子はその後について踊るようになりました。それゆえ、楽曲はCDに入れ、それをアンプに入れて流す、という形に変わっていくことになりました。

衣装も最初は浴衣に菅笠、——映像ではそうしたチームも途中にありましたが——というスタイルだけだったのですが、それがいろいろな形、和

装のもの、洋装のもの、和洋折衷のもの、というような形で広がっていくこととなります。総じてとてもバリエーションの広い、融通の利く祭りになっていったわけです。したがって高知の、特に若い人たちはいろんなチームを作って、自分たちの好きな音楽を鳴らして、自分たちの好きな振り付けで踊っていきました。そういう形で高知ではどんどん盛り上がっていったのです。

## 6. よさこい系祭りの拡大

ただし、80年代までよさこい祭りはあくまでも高知だけで行われていたものです。それが変わっていったのが90年代前半のことです。きっかけになったのは1992年のYOSAKOIソーラン祭りという、後半に見ていただいた祭りの立ち上げです。長谷川岳という名古屋出身の北海道大学の学生が、彼のお母さんが重病で高知の病院に入院していたということで、夏に高知にお見舞いに訪れます。そのついでにやっていたよさこい祭りを見ます。彼が見たよさこい祭りは現在に近いような形にもうすでになっていたわけですが、それを見て、「祭りという若い自分たちには関係がなさそうなものと思っていたけれど、これはすごい」と彼は強烈なインパクトを受けます。そして自分の住んでいる札幌で、是非このよさこい祭りをやりたいと考え、自分たちで大学生に声を掛けて、祭りを立ち上げるための委員会を作っていったのです。高知のチームの人にも当時の高知県知事にも北海道知事にも交渉して、警察などから道路を使わせてもらう許可を得て、92年にYOSAKOIソーラン祭り——北海道でやりますので、北海道民謡のソーラン節を楽曲に使おうという事でこのような名前となりましたが、——を始めることとなりました。このYOSAKOIソーラン祭りは高知のよさこい祭りに輪を掛けて急激に拡大していくこととなります。

90年代の後半ぐらいに、テレビの「3年B組金八先生」で、このYOSAKOIソーラン祭りでもよく踊られていた「南中ソーラン」という踊りが登場します。南中ソーランというのは稚内南中学校で踊られたものです。ひょっとすると皆さんの中にも、小学校とか中学校の時に「ソーラン節」というのを運動会で踊ったことがある人がいるのではないかと思います。それが南中ソーランです。ドラマが流されて一気に全国に広がったと言われていいます。このYOSAKOIソーラン祭りが急激に拡大して、今は270チーム、踊り子2万7千人ぐらいですけれども、2000年代の前半ぐらいには

踊り子4万人を超える規模にまで拡大していきます。高知のよさこい祭りをはるかにしのぐ規模にまで、急激に拡大していったわけです。

この祭りを見て多くの人たちがまた影響を受けることになります。例えば仙台にはみちのくYOSAKOI祭りという、学生が商店街の人たちと一緒に立ち上げた祭りがあります。名古屋のにつぼんど真ん中祭りも、1人の学生が中心になって「名古屋でよさこい祭りをやろう」という形で始めたものです。高知のよさこい祭りを札幌でできたのであれば、同じような祭りを自分たちの地元でもできないわけがないだろうということで、若者が中心になってよさこい系祭りが立ち上げられる現象が続いていくことになります。大阪ではこいや祭り、よさこいの「こい」のところを関西弁で言うと「こいや」になりますからこういうのですけれども、これもそうした祭りのひとつです。神戸よさこいまつりや京都さくらよさこいでも学生が実行委員会を作って運営しています。

こうして都市部では、若い人たちが中心になって自分たちの所でよさこい系祭りを立ち上げていこうという動きが広がっていきます。一方、地方は90年代中盤以降、経済が急激に冷え込み、特に町の中心部の商店街は、郊外に出来たモールやロードサイドビジネスにおされて、寂れてシャッター通りと化していきます。そうした町の商工会議所や地方自治体を中心になって、自分たちの町の中心部にもう1度活気を取り戻したいとか、町の人の中にだんだん失われていく一体感を生み出そうとして、よさこい系祭りが移植されていくことになります。数から言うところこちらが多数派です。さまざまな祭り、この一覧表の中にある、新潟総踊りにしても、沼津のよさこい東海道にしても、浜松がんこ祭や安濃津よさこいなども、皆そういう形で地方の活性化を目指して移植されていった祭りです。そのようなものが日本全国に急激に拡大していくことになるわけです。

## 7. 拡大した理由

なぜ広がったかという点、そこには札幌モデルとでも言うべき工夫があります。よさこい祭りは当初高知だけでやっていたので、他所に移植するには敷居の高いところがありました。高知の祭りの踊り方は、原宿表参道の踊り方という「流し踊り」が中心です。16箇所ほど会場がありますけれども、その内15箇所が流し踊りの会場です。先述した通り流し踊りでは、地方車が必要になります。地方車は、ベースとなるのはトラックで



すが、改造費用にはかなりお金がかかります。後ろに付いてくる人数も、原宿表参道ではそれなりの数でしたけれども、高知に行くと100名を超えるようなチームもざらにあります。多く的人数で揃いの振り付けで動きながら踊ると見栄えも良いのです。

しかし、見て分かると思いますけれど、よさこい系祭りというのはその場でいきなり踊れるような簡単な代物ではありません。そういう複雑な踊り方をしておいて、毎年踊り方を変えているところが有力チームではほとんどなのです。ということは、踊る前に3カ月とか、下手すると半年ぐらい練習しているということになります。100名も150名もで練習できる場所はおいそれとはありません。札幌ならば河川敷、高知なら海岸があるかもしれませんが、大阪や東京や名古屋で150名も集まって練習できる場所というのはなかなかないわけです。学生チームであれば学内で用意できても、社会人チームはそんな簡単に用意できません。たとえ広い場所があっても、仕事が終わった後に夜集まってみんなで練習するのですから、それを考えたら足の便のいいところでないと難しいということになります。

そもそも流し踊りというのは公道を使いますが、その許可を取るのがとても難しいのです。警察や消防署等、様々な機関からの許可を取らなければなりません。大きい通りを通行止めにすれば当然渋滞が起ってしまいます。大きい町ほど通行止めにするのは難しい。ですから、大きな町で行われるよさこい系祭りは、普通ステージ中心で行われることのほうが多いわけです。札幌のYOSAKOIソーラン祭りもそうで、今年の会場は全部で20箇所でしたが、そのうち流し踊りの会場は5箇所ほどに限られています。ステージのほうが多いわけです。多くの人が集まりますし踊りといえどもケガをする可能性もありますから、交通整理や観客の誘導整理も必要です。その点ステージならば公園などの場所さえ用意できればいいわけで、公道を閉め切ってしまうよりはだいぶ楽だということになります。

流し踊りよりもステージ踊りを中心にすれば、地方車も多くはいらなくなります。ステージはスピーカーから直接音楽を流すわけですから、高知のように地方車をチームごとに用意させる必要はないわけです。その分チームの負担も小さくなります。さらに、ステージの場合には中規模や小規模であれば20人から50人程度のメンバーでも十分見栄えが効くようになります。今回見ていただいたのは、札幌の一番巨大なステージでしたので、130人のグループでも十分余裕がありましたが、もっと小さければ小

さいグループでも十分成り立つわけです。

さらに、使用する楽曲にも工夫があります。YOSAKOIソーラン祭りでは、「よさこい鳴子踊り」ではなくて、「ソーラン節」を楽曲に使ったわけで、ここから後のよさこい系祭りでは、地元の民謡か、「ソーラン節」か、「よさこい鳴子踊り」（または「よさこい節」）を入れればOK、というルールで多くがやっていくことになります。こうして自分たちの地域に縁の楽曲をとり入れることができるようになったわけです。私は先月小田原で行われたODAWARAえっさホイおどりというよさこい系祭りに行ってきたけれども、そこでは「おさるのかごや」を伴奏に使っていました。「エーッサエーッサ、エッサホイサッサ」というものですね。それに合わせてみんな踊っていました。

この札幌モデルでは、組織委員会が非常に力を入れてチームを育成させていきました。北海道内各地に人材を派遣して、YOSAKOIソーラン祭りの啓蒙事業というのを行って、チームの立ち上げ方や踊り方などを懇切に指導したのです。その効果もあって、急激に参加チームも多くなっていきました。この成功を見て札幌以降の祭りでは、そうした啓蒙活動に力を入れたうえで、さらに自治体からの支援を得たり、自分たちでDVD等を買ったり、露店を直営にしたりして財政基盤も固めていきました。

また、祭りのスタッフには、学生や市民のボランティアを主に充てるという手法をとりました。もともとの高知の場合には、商店街が中心となって会場を作りましたので、当日スタッフも商店街の方が大多数でした。しかし、どの地域の商店街も多くの人を集められるわけではありませんし、商店街ではないところがそもそも会場になる場合もあります。そうした場合にもボランティアであれば対応できます。このようにさまざまな工夫をこらした結果、札幌のYOSAKOIソーラン祭り以降は高知以外でもたやすくできる形によさこい系祭りが変わり、そこに先述した90年代の不況の影響なども加わって、全国のあちこちに分派ができたのだと思います。

こうして広がったよさこい系祭りでは、ステージを中心に踊るようになりましたので、踊り方も変わるようになりました。先程最後に見てもらったチームなども、本当にステージで見栄えの効く演出というものを心がけていると思います。チームによっては大道具や小道具を使い、ミュージカル調の演出を導入しているところも多くあります。

## 8. 昨今のよさこい系祭り

ただこのよさこい系祭りの展開も、10年程前からまた少し変わってきています。札幌のピークは2000年代前半で、この頃から参加するチームの数も減っていきました。なぜかという、1つには踊り子の負担の問題があります。特にYOSAKOIソーラン祭りで減ったのは札幌以外の北海道内のチームです。札幌市内に住んでいるわけではないので、この人たちからみるとこの祭りに参加するためには時間も費用もかかるわけです。地方車は札幌でレンタルできますけれども、仕事を休んで何日も旅費をかけて札幌まで行って踊るといことは、最初のうちはよいけれども毎年はきつい人が多いのです。それも始まる前に何カ月もかけて練習をするのでは、踊り子にはとても重い負担となって続けられないというようなことが起こってきます。

さらに地方自治体はこの間ますます経済的に窮乏化が進行することになりましたので、少ない地方財政の中からよさこい系祭りのグループに支援をしている場合ではなくなるところも増えてきます。その結果、だんだん北海道の地方のチームから撤退が多くなっていったわけです。全国的にも非常に広がったよさこい系祭りですけれども、現在地方の祭りはチーム数が減っていたり、チームの小規模化が目立つようになっていたりしています。

その反面、都市部の大学生中心の祭りはこの頃からますます繁栄するようになりました。東京の近郊はそれほどでもありませんが、早稲田や東京農大など10以上の大学にチームがあり、かなり活発に活動しています。ここ4、5年ほど見ていてもメンバーは増えているようで、多い所は150名ぐらいのメンバーでやっているという巨大さです。

ただ、中心は名古屋から岡山の間にあります。特に関西、大阪・京都・神戸の辺りは、名だたる大学に1チームは必ずよさこい系のチームがあるという状況です。関関同立、阪大、京大から、四天王寺大学とか佛教大学といったところまでみんなそうしたチームがあります。学生だけで30チームも集められるような規模でよさこい系祭りをやっておりまして、先述した通り、運営スタッフも大学生中心で「若者の祭り」という形で盛り上がっているわけです。よさこい系祭りでは、チームごとに違う踊り方をするのですが、この関西系の祭りでは、中盤もしくは終盤に「総踊り」が盛んに行われています。総踊りというのは、全チームの踊り子が入り混

じって、数百人とか数千人規模で一緒に踊るといふものです。おそらく最大規模なのは観客を巻き込んで行われる岡山の「うらじゃ」といふ祭りです。ここの総踊りは1万人を超える規模です。6車線の公道を300メートルにわたって閉め切って会場にして踊りますのでまさに圧巻の大迫力です。

こういう形で少しずつ中心をずらしながら、よさこい系祭りは現代の日本でいまなお盛り上がっているわけですが、これが伝統的な祭りとはどこが違うのか、というところから次の話へ移っていこうと思います。

## 9. 伝統的祝祭と合衆型祝祭

伝統的な祭り集団というのはいふものだったのでしょうか。先ほど名前を挙げた松平先生の研究によると、町内（まちうち）と言われる生活共同体が祭りの基盤であったわけです。東京の日本橋の辺りには今でも小伝馬町とか馬喰町とか、いろいろな名前が付いていますよね？馬喰町といふのは元々馬喰をやっている人たちが集まっていたわけですが、昔は都市の下町にはそういう小さな町がたくさんありました。

例えば「唐津くんち」といふ祭りがありますけれども、ここもそうした町が祭りの基盤となっています。ここには、木綿町とか魚町といった町がありまして、それぞれ自分たちの曳山を引っ張って祭りに参加しています。この〇〇町といふ町内といふのは、今から見るととても狭いものです。家の数で数十～100軒ぐらいではないでしょうか。歩いて5分か10分もあれば絶対に回れます。

普段はその中で同じような商売をして助け合って暮らしている、いわば近隣の生活共同体ですが、祭りの時だけそのグループがそのまま祭り集団に変わるわけです。こうした場合、そこに代々住んでいる住民は、祭りがあれば寄付をしなくてはならないし、それ以外に町内会費から費用を出さなくてはならない。若者は山車の曳き子や御神輿の担ぎ手を担当しなくてはならないし、中年の人なら他の町との渉外担当とか、若者たちのまとめ役とか、それからさまざまな参加者の世話をする裏方とかというように形で関わっていかなくてはなりません。簡単に言うと、祭りにその町の町内の人たちは強制的に参加しなくてはならないのです。その代わりに、町内以外の人たちは本格的な形では一切参加できないというのが基本でした。せいぜい観客として参加が許される程度です。要するに、祭りへの参加とは町内の人間のある意味での義務と権利であり、祭りはその町内の誇

りでもあった、ということになります。

90年代に私が唐津くちを訪れた時に、地元のケーブルテレビを見ていたら、祭りをよく知っている地元の中高年の男性が解説者として次のようなエピソードを語っていました。昔は曳山を持っている町内の子と曳山を持っていない町内の子がけんかしたら、最後は「うちの町には曳山がある」と言えば絶対に勝てた、と言うのです。そのぐらい曳山を持っているとか、祭りのグループになっているというのは、誇りやプライドになるようなもので、町の中で威信や権威になるようなものとしても働いていたのです。

でもこれが最近の祭り、よさこい系祭りや阿波おどり、踊り系の祭りではじわじわ広がっているエイサーや郡上おどりなどの祭りではずいぶんと違うのです。80年代の終わりに、松平先生は高円寺の阿波おどりを研究してその新しさに気づきました。そして「合衆型祝祭」と名付けました。日常的生活空間から脱出した個人の集まりである「衆」、あるいは自由で一時的な仲間としての「党」が、互いに祝祭の担い手となって行われる、そうした一見無秩序に見える開放的な祝祭行為というのが、合衆型祝祭の定義です（松平誠『都市祝祭の社会学』新曜社、1990年）。

伝統的祝祭の単位となる町内の人々の多くは、地縁や血縁で結びつき、同じような商売を営み相似た階層に帰属していました。このようにグループを形成していたものが、そうした結びつきや階層と関係のないチームになったり、家族単位で（半）強制的に入るものが個人単位で自発的に参加するグループになったりする。その結果として、メンバーの居住範囲はもともとの小さな町内ではなくて、はるかに広域に及ぶようになる。そのような祭りを松平先生はこう呼んだわけです。高円寺の阿波おどりに私はいは調査に行っておりまして、確かにこうした要素がかなり濃厚でメンバーは多様なのですが、よさこい系祭りはさらに多様といえると思います。

よさこい系祭りでどうやってメンバーを集めるかということ、大抵の場合は一般公募をして、もともといるメンバーが口コミでさらに広げるという形を取ります。そうして練習に来た見学者が加わることによりチームが成立します。よさこい祭りが始まった高知では、当初はインターネットなどない時代でしたので、祭りが始まる3カ月ぐらい前になると「よさこい掲示板」——掲示板というと今はインターネットにありそうですけれども、本当に商店街などに置いてある掲示板でした——に、「今年われわれの

チームは踊り子を何人募集します。関心のある方はこの商店街の〇〇というお店に来てください。」と書き込んでメンバーを集めていました。それゆえ、地縁や血縁、階層帰属などとは関係なく、個人単位で自発的に参加をするという形になるわけです。今年はこのチームで踊るけれども、来年は別のチームで踊ろうか、というように、チームを変えることも可能です。町内でやっていた祭りでは、隣の町の山車の方がかっこういいからあっちに移りたい、と言っても到底無理な話です。でも、このタイプの祭りならば許されます。もちろんチームのリーダーや仲間達に許可を得ないと裏切り者扱いをされてしまうと思いますけれども、可能になってくるのです。

現在よさこい系祭りの中心になっているのは、「クラブチーム」と呼ばれるグループです。これらのチームも多くの場合その母体はもともと地域や会社などにありましたが、いまやその地域の住民や社員だけが踊っているわけではありません。むしろそうした人たちはホスト役やスポンサー役を務めていて、踊り子は公募によって集められた一般の人たちで構成されるのが通常です。

ここで、祭りは非常に大きな変化を遂げていくことになるわけです。伝統的祝祭では、祭り全体を運営している人は町内や地域の人です。そして、祭り集団を作っているリーダー格の人も町内や地域の人です。さらに、実際に山車を引っ張ったり御神輿を担いだり踊ったりというパフォーマンスをする人も町内や地域の人ですし、当初の状態としては、見物する人も町内や地域の人ということで、地域の中ですべてのことをこなすという形のもだったわけです。でもそれが徐々に町内の外に、いろいろなものが外部化—市場化と言ってもいいと思うのですけれども—されていくという変化が起こっていきます。

## 10. 祭りの外部化

戦後日本では、次第に観光化の進んだ祭りが現れてきます。そこでは祭りの見物人がまず外部者になったわけです。もともと町内の住民向けに見せていたものが、外部の人向けに見せるように変化していくのです。観光資源にもなるわけですから、観に来た人たちが観てよかった、また観に行きたいと思うような祭りにしたほうがいいわけです。知り合いが踊っていて自分も一緒になって踊って楽しいという祭りと、観光客として観に行っ

てよかったと思う祭りは当然違ってくる。観光化が進んだ祭りでは、この時期に栈敷と言われる臨時の客席が作られるようになります。ただ見ているだけならばビールを飲みながら座ってゆっくり見るなどというふうにしたいわけで、立ったまま前の人がいるとよく見えないような所で見るなんてとんでもないということで、そのような変化が起こってきます。

合衆型祝祭としての特徴が鮮明な阿波おどりやよさこい系祭りの場合には、外部化はさらに第2段階に進んでいきます。ここでは、祭りの参加者(=パフォーマー)が外部者になっていく、という変化が起こってきます。これらの祭りでは、先述した通り一般公募などで募集されるがゆえに、チームのメンバーには祭りを開催する地域に住んでいない人も多く、この段階で見人だけでなく、する人も多くが外部者になっていくのです。

そしてさらに、阿波おどりの場合にはまだ限定的ですが、よさこい系祭りの場合には、祭り集団や祭りのチームのリーダー層も地域の人ではなくなるという、外部化の第3段階にまで事態は大きく進んでいます。要するに、余所の町にあるチームが参加費を払って参加するという形が基本となって祭りが行われるようになるわけです。原宿表参道元氣祭りスーパーよさこいの場合、例年100前後のチームが参加するのですが、地元渋谷区のチームは私が数えたところ2つか3つしかありません。少し広げて東京都区内のチームを数えても到底半分もいきません。多くのチームは、隣接する多摩地域・埼玉・千葉・神奈川をはじめ高知や北海道に至るまで全国各地から集まってくるのです。よさこい系祭りにはこういう形態のものが非常に多くなっています。高知のよさこい祭りの場合は、今でも4分の3ぐらいは高知県内のチームでしょうか。北海道のYOSAKOIソーラン祭りであれば、3分の2は北海道内のチームだと思います。けれどもそこからさらに分派していった祭りの中には、7割8割が県外チームで、市外チームに限れば9割となってしまうようなものも決して珍しくはないのです。

この第3段階ぐらいまで外部化が進行していくと、地元に残される役割は、祭り全体を運営すること、つまりみんなが踊るための舞台を用意することに特化していくこととなります。YOSAKOIソーラン祭りを作った長谷川岳は当時「街は舞台だ」というスローガンを打ち上げました。札幌という街を舞台にしてみんなが自由に祭りをやっていこう、というふうに呼びかけたわけです。しかし、この第3段階ぐらいまで進んでくると、本当に街や地域というものが果たす役割は舞台の提供のみとなります。

## 11. 外部化のメリットとデメリット

ただ、この話はすべてがよいことばかりではありません。良い面もあれば悪い面もあるわけです。例えば祭り集団に自由に参加できるようになったことは、多くの人にとって良い面です。今までは、いかにっこい祭りやすごい祭りがあっても、自分がその地域に生まれた人間でなければ参加できなかつたわけですから。しかし、よさこい系祭りならば、参加したいと思えば参加することができます。ただし、これにも悪い面があるのです。

例えばチームの主催者側から見れば、踊り集団に自由に参加できるということは、いつ踊り子が辞めてしまってもおかしくないということです。少し体調が悪くなったので辞めますという口実で、実は別のチームに入りたいので辞めてしまう人が出てまったくおかしくないし、せつかく一から教えたのに少し上手くなると有名なチームに移ってしまうということも起こりえます。しかしチームとしては毎年祭りに参加したいのですから、安定した人数というものは常に維持したい、特に賞でも狙っていれば踊りの技量の高い人たちには是が非でも毎年参加してもらいたいわけです。

同様のことは、祭りと祭り集団の関係においてもいえます。今までであれば祭り集団というのは、その祭りに帰属するものであつたわけです。例えば、唐津くんちのグループはその祭りに参加するためにできているもので、東京ドームなどで行われる日本の祭り総全集のようなイベントに呼ばれてゲスト出演することがまれにあつたとしても、基本は自分たちの祭りだけに参加するのが当たり前でした。しかし、よさこい系祭りの世界ではどこに行っても構わないということになります。それゆえ、熱心な祭り集団は多くの祭りに参加します。早稲田大学に「踊り侍」というチームがありますが、ここは毎年札幌から高知まで全国10数か所の祭りに遠征をしています。遠征と言っても関東地方は除いてありますので、関東地方の中でもあちこちの祭りに参加していくわけで、小さなものまで入れれば年間20回もの舞台を踏むこととなります。踊り子から言わせれば一生懸命練習した踊りですから、年に1回だけしか披露できないなんてもったいない、特に盛り上がっていて観客の反応のいい所では是非やりたい、後ろを見ればお城やきれいな山が見えたり海岸で港の夜景をバックに踊れたりする会場など、いろいろなところで踊りたいという人たちがたくさんいるわけで



す。そのような点から言うと、この祭りに祭り集団が自由に参加できるというのも、ある意味良い面があるわけです。

しかし祭りの主催側から言わせると、こうした参加の自由度の高さは、祭りに何チーム参加してくれるか、見栄えがするような踊りをしてくれるようなチームがどのくらい参加してくれるかを結果として不安定にすることになります。ホストチームといわれる地元の有力チームは、声をかけてちゃんと参加してもらうことが可能だとしても、他地域のチームに関しては欠席されてしまってもおかしくないわけです。しかも、よさこい系祭りは200箇所以上で行われているのですから、祭り同士の間での競争もあります。いまやこの種の祭りは、正月から始まり最後は大晦日に近い時期まであります。しかし、祭りは主に週末中心に開催されるわけで、一年は50数週しかありません。ということは、複数の祭りの日程が被ってくることになるのです。当然寒い時期は盛り上がりませんので、開催は6月頃から10月ぐらいまでの間、せいぜい11月初旬までの期間に集中します。ということはさらに日程が被るということになるわけで、チームは同一日程の祭りの中から参加するものを選ぶことになります。この結果、参加チーム数が不安定になるというデメリットも、祭り主催者側から見ればあるのです。

さらに、こうした参加の自由度の高さと関連して、チームと踊り子との間に新たな問題が生まれています。もしもチームが踊り子を引き止めようとするれば、魅力的な踊りをやったほうがいいわけです。それでは魅力的な踊りをするためにはどうしたらいいか。テンポの速い踊りだったりむずかしい振りの踊りだったりした方が見映えが良くなりますし、そうでなくても全員の踊りがよく揃った質の高いパフォーマンスであれば高い評価を得ることができます。しかし、その分だけ練習の時間やハードさは増し踊り子の負担は当然高くなります。1年か2年であれば、全力で突っ走り良い踊りをしてよかったと思えるかもしれません。しかし、何年もそれを続けていると仕事が成り立たないとか、家庭が成り立たないというような問題が起こってきます。そうすると踊り子は櫛の歯が抜けるように辞めていくことになるのです。これを私は「踊り子の燃えつき問題」と言っていますが、いまや先述した地方のチームだけでなく札幌などの都市部も含めてかなり広範に生じていると思われます。

ここまで参加の自由度の高さを中心に語ってきましたが、よさこい系祭

りの持つ新しさの功罪はそれにとどまるものではありません。この種の祭りは、観光の中でも「参加型観光」とでも呼ぶべき役割を果たすことがあります。東京や大阪のような大都市に踊り子が全部で6,000人集まろうが、1万人集まろうが大したことはないかもしれません。スーパーよさこいには踊り子が6,000人ほど集まるといいますが、土曜日や日曜日の原宿には普段から数十万人の人が集まってくるので、それだけ加わったところで大した違いがあるわけではありません。しかし、地方都市にとっては、6,000人の踊り子が集まるとか、30万人の観客が集まるというのは大きな観光イベントになります。しかも、実際に地方の祭りを訪ねてみると、観客の中に占める踊り子の比率が高いことに気づきます。この傾向は小規模な祭りの方が顕著なのですが、私はそれを見ていてある時「そうか、この踊っている人たちが地方の祭りから見ると観光客なんだ」と気づきました。踊りに来た人たちは、もしその祭りを気に入れば、毎年来てくれて泊まってくれて土産まで買って帰ってくれるわけですから、重要な顧客となるわけです。大抵の祭りは、その地域で最も人が集まる観光シーズンとは違う時期に開催されますので、そういう意味での集客効果も期待されているのだと思います。

ただし、こうした参加型観光に関わるような効果も、関連の業界の関係者にとってはメリットがあっても、地域の住民にとってみれば迷惑以外の何ものでもないという場合もあります。例えば札幌の場合、会場があちこちにあるので、地下鉄やバスを使って踊り子は移動します。30人から100人にもおよぶ踊り子がバスに乗ると満員ですよね。地下鉄でも車輦の中は踊り子だらけ、ということになります。踊り子は会場で思いっきり踊って汗まみれになっていたりするわけで、市民からすれば汗臭い派手な衣装を着た人が大量に地下鉄に乗ってきて、邪魔だとか迷惑だとかという意見もたくさん出てくることになります。自分たちの家族や知り合いが祭りをやっている状態で、うるさいとか臭いとか道が混むとかいうデメリットが生じるのであれば我慢できるけれども、自分たちとまったく関係ない人ですから。そういう人たちが勝手にやって来て、楽しんで、なぜ自分達が迷惑を受けなければいけないのかという軋轢もかなり出てくることになるわけです。

さらに、近年の変化はこの祭りに新たな性質を与えつつあります。先述した通りよさこい系祭りは、高知で始まって札幌に広がり、さらに全国の

いろいろな場所に飛び火していったわけですが、多くの流行が東京から全国に広まる中で地方から地方へと広まるという独特の性質を持っていたわけですが。しかし、自由度が高く外部化や市場化が進めば、それは資源を持っている所が次第に競争に勝つようになります。例えば、よさこい系祭りの振り付けは振り付け師という人たちがかなりのチームでしています。特にトップのチームにはそういうところが多いのです。その振り付け師にかっこいい振り付けをしてもらうにしても、振り付け師を務められる者も、新しい振り付けを自在にこなせる踊り子も地方よりも大都市の方に多くいます。こうしたことも、地方から始まったよさこい系祭りが都市部に重心を移しつつあることの背景にあるのだと思います。このことは、前にふれたステージでの演舞中心の構成が、練習場の確保なども相まってチームの小型化を産むこととともに、結果としてよさこい系祭りのオリジナリティを自ら薄めていくことを生んでいるように思えてなりません。どうしてもチームが小型化すれば、だんだん通常のダンスパフォーマンスに近づくことになりますから。

## 12. 選択縁

以上述べたような功罪をよさこい系祭りは持っているのですけれども、ここから現在の日本社会とのつながりを2点ほど語っていきたいと思います。その1つ目は、選択縁をはじめ〇〇縁と呼ばれる社会学の概念を見直すということが、このよさこい系祭りの動向をヒントにできるのではないかということです。選択縁というのは、地縁、血縁、社縁、学校縁と言われるような、人間のつながりのタイプのひとつです。80年代ぐらいから、上野千鶴子先生などが語っていたと思いますが、人々の自発的な選択でさまざまな人間関係が作られるようになってきたので、それを「選択縁」と呼ぶことにしたわけです。確かに、よさこい系祭りの変化を見ても、クラブチームが中心的な役割を果たすようになったり大学生のサークルチームが増加していることの中には現代日本社会における選択縁の拡大を認めることができます。しかし、その一方で、より詳細に見ていくと、血縁、地縁、社縁、学校縁と選択縁とは、少し違うレベルにある異質な概念ではないかということが見えてくるのです。

選択縁とは別に、東京学芸大学の浅野智彦さんは共通の趣味や関心で人が結びつくことを「趣味縁」と呼んでいます（浅野智彦『趣味縁からはじ

まる社会参加』岩波書店、2011年)。よさこい系祭りのクラブチームや学生サークルチームは、よさこいを踊りたいという趣味や関心で集まっているのですから、趣味縁ともいえるわけです。しかし、趣味縁と選択縁とはそれぞれ注目しているところが違います。前者は、人間関係の契機となっている紐帯の種類—家族関係、地域関係、職場関係、学校関係、趣味関係—のそれぞれ近接性であるのに対して、後者はその人間関係が参加者にとって強制的（または半強制的）か自発的に照準する概念であるわけです。ですから、この2つを組み合わせると資料の表2のようになります。要するに、強制的（または半強制的）なものとして、従来の血縁、地縁、社縁、学校縁というものがあつたのですが、実は選択縁の中には、趣味縁と同列に、よさこい系祭りでも出会う、踊りたいと思う家族や親戚の人たちだけで作るチームとか、地域の中で一緒に踊りたいと思う人たちだけで作るチームとか、職場の中や学校の中で踊りたい人たちだけで作るチームとかもあるわけです。

例を出してみましよう。先述した早稲田のチームの正式名称は「早稲田大学“踊り侍”」といいます。早稲田大学の学生は全員で1万人以上いますが、踊り侍は規模が大きいものの150人程度で、その中には他大の学生も含まれるので、早稲田大学の学生全体に対する構成率は1パーセントくらいということになります。100人に1人ぐらいしか入っていないわけです。要はこういうものを学校縁と呼ぶべきなのかどうかということです。また、私は以前東京の鉄道会社のチームを調査したことがありますが、そこは社員が8千人ほどいます。それに対してチームのメンバーは全部で60人です。1パーセントを切っています。しかも、聞いてみると同じ会社の

表2 縁の分類

紐帯の種類	(半)強制縁	選択縁
血縁関係の近接性	血縁	家族選択縁
居住地域の近接性	地縁	地域選択縁
職場の近接性	社縁	職場選択縁
所属教育機関の近接性	学校縁	学校選択縁
趣味・関心の近接性	—	趣味縁

社員ではあるが同じ職場の人はほとんどいないので、集まった当初のメンバーは最初まったくの見ず知らずだったそうです。こうしてみると、従来の社縁のイメージとはかなり大きく異なることがわかります。ここから、自発的に人間関係を取り結ぶことが多くなった現代社会では、縁というものに関してもう少し新しい枠組みで見直して分析することが必要なのではないか、という示唆が得られるわけです。

### 13. 受益圏と受苦圏のズレと実践共同体の解体

2 番目は、祭り集団が変わることでそれが従来持っていた実践共同体と言われるような性質が崩れてきている、というポイントです。岸和田だんじり祭りでは中核的な若頭という役割を務めた人が書いた本を読んでもみると、町内というのは一生所属する集団で、若いときから祭りの中の役割を順番に務めていくことがわかります（江弘毅『岸和田だんじり祭り だんじり祭り若頭日記』晶文社、2005年）。

最初の小さいうちは観客として、少し大きくなってくるとだんじりを遠くから引っ張る役割として、もう少し大きくなってくるとだんじりに近い所で引っ張る役割に、そして一人前の若者になると、だんじりの横にぶら下がってカーブを曲がる時の重し役になったり、カーブの時に後方でだんじりを曲げる危険性を伴う役割を果たしたりしていきます。そして、その後には、プレーキをかける役やだんじりの上に乗って指示する役割などもこなしますが、どちらも下手をすると、大怪我をしたり死んだりしかねない危険極まりない役割です。そして、その後中年となって実行役としての役割を終えると、今度は、祭りのチーム全体のまとめ役や現場の指揮官のような役割を務め、さらに上になると他チームとの渉外活動を担当し、人生の最後には祭り全体の運営にかかわることになるのです。

簡単に言うと、どんどんとジェネラリストになっていくような流れを、祭り集団が実践共同体として持っていたのです。しかし、よさこい系祭りになると、その流れは働かなくなります。チームを運営する人は最初からチームを運営する人で、踊り子は最初から踊り子で、どちらも最後まで下手をするとその役割しかやりません。見る人は見る人で、ずっと見るだけの人、と分かれてきます。他者がどのように祭りに関わり、どのように感じ、どのようなところに問題があるかと思っているかといったことが、お互いに見えなくなってくる。こうしたところに現代的な祭りにおいて軋轢が

生じる根本的な理由があるのだと思います。

いいかえれば、祭りを見る人、祭りでパフォーマンスをする人、祭りのチームを運営する人、祭り全体を運営する人が役割ごとに分かれてくる中で、祭りをめぐる「受益圏」と「受苦圏」の点でも—これは船橋晴俊先生や梶田孝道先生が作った概念ですけれども—伝統的な祝祭とは大きな変化が起こってきます。伝統的な祭りは、単純化すれば、自分たちで楽しむ代わりに迷惑も自分たちで受ける、という自給自足的な構造にありました。自分たちが楽しむ、これが受益圏です。そして自分たちが苦しむ、これが受苦圏です。つまり、受益圏と受苦圏とは一致してあったわけです。しかし、よさこい系祭りのような新しい祭りでは受益圏と受苦圏がずれてしまいます。踊る人や観光で見て楽しむ人は、受益はあるけれども受苦はほとんどないわけです。その反面、地域の住民は受益がほとんどなくて、受苦ばかりがあるということが起こります。そこにこの祭りの中で起こっているさまざまな軋轢というものが生まれてくることになるのです。

今まで話したことは新しい祭りに関することです。しかし、地域共同体を基盤としない生活の形は、われわれの社会の中では既にどんどん拡大しているわけで、こうした問題の発生は祭りの世界の中だけのことではありません。それゆえ、ここに見られる受益圏と受苦圏のずれや実践共同体の崩壊というような問題も、形を変えてこの現代社会のわれわれの暮らし全体に広がっているものなのだと思います。それがどのようなものであるのかについてはまた機会があればお話ししたいと思います。

時間の関係で最後は少し急ぎ足となってしまいましたが、これで本日の講演会での私の話は終わりにしたいと思います。

#### (付記)

本稿は、2015年11月4日に行われた日本大学社会学会特別講演会「祭りの変化から見える日本社会」の内容をまとめたものである。それゆえ、文中の表現は2015年11月時点のものとなっているので、ご注意いただきたい。